

調査・研究活動-2000年度

雑誌名	アジア・アフリカ文化研究所研究年報
巻	35
ページ	183-202
発行年	2000
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011286/



調査・研究活動——二〇〇〇年度

台湾原住民社会調査

研究員 末 成 道 男

期 間 二〇〇〇年三月二三日～四月二日

調査地 台湾（台北・屏東・台東）

春期休暇を利用し、当研究所の研究助成を受けて十日間の台湾の調査旅行を行ったので、報告書代わりに、行動記録、聞き書きと若干の感想を綴ってみた。これらの資料は、いずれ論文の一部としてまとめた。

◇中央研究院民族学研究所（三月二三日）

二三日早朝出発、台北には比較的早く着いたので、研究院の敷地内にある活動中心にチェックインをして、研究所を訪れるが、所長不在。事務室に寄って挨拶し、ビデオ閲覧を申し込み二四日朝から見ることにする。

①研究所蔵ビデオフィルム（三月二四日）

原住民関係未見のもの八本を見る、

・A原住民舞系列Vのものは、テクニクの水準は高く、きれいに作っているが、どこまでが伝統的なものか、どこまでが演出や他族から導入したものと分からない点があり、民族誌フィルムとしてはうっかり使えない。

調査・研究活動

むしろ、舞台芸術のひとつとして鑑賞すべきであろう。

・民族誌的に良かったものとしては、「石壁部落的衣服」がタイヤル族の祖霊祭と伝統衣服の復元活動を扱っていて面白かった。また、「土坂女人」もパイワン族の都会の建築現場で働く青年と故郷との交流を描き、初生子相続などを取り上げていて興味深かった。

②パイワン族調査（二〇〇〇・〇三・二五～三・二八）

今回は、一九六五年夏に一ヶ月滞在調査し（台湾パイワン族の＜家族＞M村における長子への贈与慣行 *pasadai* を中心として）『東洋文化研究所紀要』五九・一―八七、一九七三・〇二、一九九一年に再訪しビデオ撮影したパイワン族のマカザヤ社を訪れ、一九三九年に宮本馨太郎氏撮影の八ミリフィルムを村の人に見てもらって感想を聞くのが一つの目的である。そのため、映像専門家の原田健一氏も同行した。

三月二五日早朝六時四五分、松山駅から列車で屏東まで、バスに乗り換え中央山脈のふもとのベースタウン水門に着く。三五年前の水門は、西部劇に出てくるような平屋建てのバラックが荒野に這いつくばっているようならぶれた感じをおこさせる田舎町だったが、現在はコンクリートの建物が建ち並ぶ市街地になっている。道路も以前は砂利道を材木運搬用のトラックがあえぎながら坂道を偶に上っていたのが、いまは、アスファルトの道を乗用車が滑るようにひっきりなしに通っている。しかし、通行人の顔は、彫りの深いマラヨポリネシア系が多数を占めている。近くに宿を取り、荷物を置くと、日暮れまでには時間があるので、町はずれの山への入り口にあるバクヒョウを訪れる。

◇バクヒョウ

バクヒヨウは二〇〇戸余りの密集集落で、上のマカザヤなどの集落からの移住者も住み着いていて約半数を占める。一〇〇戸が天主教、七〇戸が長老教、安息日会が一〇戸、五戸が「佛教」と称して、いずれの「教」（キリスト教）にも属さず、昔からの信仰を続けている人々だが、ほとんど年寄りである。

特に知り合いの家は無かったので、飛び込みで、R氏（六八才、男性）の家に入る。自己紹介、三〇年前に上のマカザヤ村で一ヶ月滞在調査したことなどを説明する。その受け答えのなかで早速「今、原住民の習慣はとも良いへとされているらしい。それで、へ上の方では、もともと返えそうとしている。へもとの習慣に従えば礼儀もあるし、年上を尊敬するし、正直。」という発言が面白かった。つまり、国民党政府になってから原住民の習慣が「遅れた」もので、「改善」して「文明」化すべきものとして、教育、行政、布教などにおいて指導されてきたが、最近の地方文化再発見の趨勢の中で、見直そうという動きが公的レベルでも活発になり、かつては年寄りの繰り言としてしか受け止められていなかった旧慣の徳目も、意識上はプラスの評価が与えられるようになった。もちろん、高度経済成長以降の急激な社会変化のなかで、これがどこまで、若い世代に受け入れられ、実践されて行くかは別問題である。ただし、仮に政治家のリップサービスと表面的なスローガン化に終わるにせよ、こうして公的な肯定的評価が与えられたことは、原住民のアイデンティティの拠り所として持つ意味は大きいであろう。

三五年前の調査で、通訳として付き添っていたテナヨルさん宅を訪ねる。前回（一九九一年）寄ったときは、酒で健康を害していて会えな

かったが、すっかり元気になれていた。当時は子供だったお孫さんに子供が出来ていて、その子がまた勤がよく、北京語ながら曾おじいさんには通じないような要点を察して回答をしてくれるので助かる。宮本肇太郎氏の六〇年前のフィルムを見てもらう。堀棒から鋏に変わったことなど、殆どが物質文化、技術についての感想だったが、頭目について「耕作せず、狩猟せず、踊りもしない、年中遊んでいるようなもので楽な身分だった」と述べていたのが頭に残っている。

◇マカザヤ社（三月二六日～三月二八日）

・今回の主探訪地であるマカザヤ村の林東海氏宅を訪れる。本人はすでに他界され、夫人から夫君のこと、最近の村および台湾の様子について話を聞く。さらに、旧慣についての話も、前回より、日本語がいつそう滑らかになり新しい事実や、ライフヒストリーに関する話をじっくり聞くことができた。現在村で天主教は一五人位、長老教は五〇人位、土曜に礼拝を行う安息日会は四戸であるという。

・安息日会 夫人の夫の妹さんが安息日会の信者ということで紹介してもらい、話を聞く。そのため初対面でも微妙なことも話してくれる。入会動機は、どう考えても安息日会が良かったからである。村長は長老教の伝道士を勤め今は執事になっているが、その父親と弟は安息日会の信者である。また、もう一人も父親と弟がエホバの信者であるが、本人は安息日の真面目な信者である。かれが、「親の前にいると、五分も一〇分もエホバ、エホバというのでたまらない」とこぼすので、「家族全員が同じ教を信じるのが良いかも知れない。しかし、本当に入るのは教派で決まるものではなく、人間としての信仰の如何によるのだ」とさとしてあげる。収穫時に、

アワ、サツマイモ、里芋、豆とお金を供えて祈る。非信者どうしの結婚は希望すれば許す。天主教と長老教の間での結婚ではだいぶ問題が有るようだという。

・村の日曜日の礼拝を見るため天主教会を訪問する。人数も少なく開始が遅くなるようなので、長老教会の礼拝を参観することにする。二階建てになっていて、下では子供達が賛美歌を歌っている。二階の本堂も以前のがらんとした感じから、正面に十字架のほか、「营造共同体 落實上帝国」と書いた飾りや周囲にも箴言を漢字で書いた額が飾つてあるなど、活動がよりクラブ的になり、日常生活に密着してきていることを反映しているように思われた。説教、祈り、活動説明で用いられる言葉が、パイワン語、中国語（普通語）そして、ところどころに日本語単語が混じるなど興味深かった。信者が開いている聖書は、パイワン語訳をしたもの、広報的なパンフレットは中文で記されている。

◇昔話

・創造のときの昔話 村の後ろの山に創造の時の集落がある。Inatani taini Moakai と称していた。今でも集落の石垣が残っている。頭目のMoakaiが村民に、尻尾が開くとききれいな小鳥を捕まえるように、ただし石を投げたらだめ、やさしく抱くようにして捕るよう命令した。村民は、そんなふうにしては一向取れるはずがない。仕事があるのに、たまたまMoakaiの眠っている間に、老埤に逃げた。今、平地の老埤に居る人々は、Moakaiの手下たちの子孫である。Moakaiが目覚めると、臼の上に箆を置いて獣肉の頭目の分だけ置いてあるが、村民は見あたらない。平地の方で、ぐわめいている。その時、上の方から崖が崩れMoakaiの家も巻き込

まれて、Moakaiは窓に挟まれて死んだ。ここのお化けはいたずらだ。この蛇も、やたらに殺さない。

・自分の息子が、この付近に薬草取りに行つて足を河で洗っていたら、晴れているのに雷が鳴った。「私は、Mavaryuuへ頭目系の家号Vの誰々」と叫んだら、雷が止んで雨があがった。

・ここへ台湾Vにいる民族は、洪水の前から栄えている集落である。洪水の時埋もれた。建築するために地均しする時、古壺を見つける。派出所のところに古い集落で、壺が沢山出た。大武山のほうも高いので崩れた。その畑に行くと今でもトンボ玉を見つめる。へこれはVノアの洪水の時へと思われV百個位の竈があった。パイワン族は、牛や山羊を養っていたが、全部崩れてしまった。

・トラバコン

犬と一緒に来たら、トラバコンのワタというところに来て、前足で掘つて眠った。水汲みに行つて見たら、見晴らしが良く周囲も広いので、安全だからととも居たところから移住してきた。そこから現在のトラバコンへは、自分が三歳のころ昭和七年（一九四二）に移住してきた。大雨が一〇日間続き、山の中から熱い水が出てくる。スパイワン社とマカザヤ社のそれぞれ半分が若葉社に移住した。また、一八歳のとき大きな暴風が吹いて、葉が全て吹き飛んだ。しかし、一〇月で里芋は熟していたので、食料に影響はしなかった。人命の被害も無かった。

・五年祭 今やっているのは、来義郷だけ。他では禁じられている。もと、カサギザンの部落がTanainadanにあったころ、やっていた。しかし、その祭りの仕方が悪かった。五年祭は、亡くなった人々の霊を呼び、ご馳

走を作って家の内に入れて食べさせる。中の品物の上に木の枝や青い草を取ってかぶせておき、お化けに見せない。供え物のご馳走だけ先祖の霊にV見えるようにする。供え終わると、「もう帰きなさい。ぐずぐずしないで帰らないと独りぼっちになるよ。」と言って帰らせる。この時の供え物は、すでに幽霊へ祖霊を「お化け」とか「幽霊」と表現しているのは、パイワン語の語義に相当する日本語が無いためであるVが食べているので、さびた味がして美味しくないという。この祭りをやっていた時、間違って互いに殺し合いになった。数人だけ生き残った。それが今のカサギザン社の祖先である。それ以降、この辺では五年祭はやらなくなった。これは日本統治よりずっと前の大昔の話である。来義郷の頭目高武安（六五・七〇歳）が詳しい。クララオの頭目の家はそのまま残っていて、きれいにしている。

◇怪異話

・火の玉 ジャジャ (RyāJa Rは卷舌音) きれいな火の玉が二つあって自分で歩いて行く。

・幽霊を見た経験 母が語っていた話だ。頭目の父が亡くなって女たちが毎日慰めに来ていたが、畑にイモ堀に出かけた。母とやっと歩けるようになった私とが、いま居間に使っている新しい建物に居た。この家を創った時の古い隣の建物の方で、五・六人の男女が話し合っているのが見えた。男は短い腰巻き、女は長い腰巻きを付けていた。母は、万一のことがあってはと、実家のタラバコンに帰ってきた。自分も、ある時道ばたで幽霊を見たことがある。夕方、河のこちら側を二人が白い布を付けて歩いてくるのが見える。必ず出会うと思って歩いていたら、急に見えなくなってしまう

た。夫も違う場所で見たとあると言っていた。ハ夫は長い間、長老教の伝道士をつとめ、本人も熱心な信者で二人とも長老であり、熱心なキリスト教徒であるにも係わらず、こうした超自然体験を必ずしも否定していない点が興味深い。こうした体験と、異教の神や呪術を信じる「迷信」とは区別しているようであるV

◇日本

・日本統治時代に、水門の街の後ろの山と平地の間にトンネルを掘って灌漑をしてから、平地にも水稲ができるようになって、米が食べられるようになった。ハトンネルの工事人夫は、どのように調達したのか？強制あるいは工賃に平地人と格差はなかったか？V平地の人も山地の人も工事に参加したが、賃金は払っていた。当時の一銭は大きかった。不公平なことはしない。日本は、本物は本物とし、偽物と本物を区別する。ハかつて山地と平地の賃金格差が存在したことは事実だが、この時は無かったのか、あるいは小さかったのか、わからなかったのかは不明V

・戦争の時は、皆貧乏だった。食べるものも着るものも無かった。金も無く、有っても工場停止で買う物もなかった。ネズミが大発生して、イモを食べてしまった。薪を切って、平地に売りに行って食料に替えた。

・教育は、四年間。学校ではなく教育所と言った。半日勉強し、午後は実習と言って畑の耕し方、肥料のやり方などを習う。わたしの受けた日本語の教育はこれだけだが、長老教に入って、聖書の意味を深く知りたいため日本語が上達した。パイワン語訳をローマ字で表したものがあがる、満足できない。日本の聖書の方が、深くわかる。

・日本時代 ここに居た日本人が、二月末に引き揚げていった。頭目の

名前の Muni というのを付けてあげた。記念として何を贈るか、衣服、胸飾り、鉢巻き、ひと揃い等、いろいろな意見が出てごたごたして決まらなかった。そこで、腕輪を記念としてあげた。将来婿さんを貰ったら、写真を撮って贈って下さいと言った。喜んで、平地に下るときも外さずそのまま身につけて行った。

・ 一昨年（一九九八）日本に観光に行った。八日間でいろいろなところに行った。△どこが、一番面白かったか？▽大阪も二晩、東京も二晩、それぞれ良いところはあるが、一番印象深かったのは、北海道でアイヌの祭りに参加したこと。自分は、神様を信じているから見るだけだった。昔のまじないの仕方を話してくれた。

◇頭目

・ 頭目系の者の見方。昔の家庭は、嫁、婿、養子ともに収入はすべて家長に渡っていた。家長は、それを蓄えて置いて、後を継ぐ子や孫のために残しておく。今は、千元、二千元を父親にわたし、残りの数万元は自分のところに留めておく。「何に使ったか。」「何々に使って、もう無い。」「そうか。」ということになる。昔は、若者が、年寄りや女の荷物を担いでいるのを見ればすぐ代わって持っていた。今は、神を信じるようになって、反対に愛とか父親の教えとかはどこかに行ってしまった。

・ 頭目の葬式のやり方は、基本的には平民と同じだが、頭目が亡くなると大きな声で泣き叫び、一ヶ月も二ヶ月も慰問に来て絶えることがない。△頭目のところに集まった税金はどう使われたか？▽一、働いていないので、その生活費に。二、未亡人や孤児などの面倒を見る。三、栗祭などの時の宴会を開いてみんなに振る舞う。昔は、乞食になりそうな人が居たら、

頭目が養って自分の子供のように扱い、結婚させる。頭目がその子を本当に可愛いと思ったら、身分を少し高くしてやる。自分の父親の代までそういうことがあった。

◇むらでの教育

父親の教育として、ご飯を食べるとき「子供は大きい物を食べてはいけない。」と言った。これは、年寄りに対して残しなさいという意味である。△このような教育で叩くことはなかったか？▽少ない。ゆつくりゆつくり話して教えた。来客に対して「おばさん、あんたは元気か」、畑では「ご苦労さん、ご苦労さん」という。子供が、椅子に座していると、「あんたは、山豚ハイノシシのこと▽何も何も未だ取っていないからね」と年寄りに譲らせる。匙を汁の中につっこんで豆を掬うと、「あんたは泳ぐことも知らないのに」と言われる。頭目だからといって、人を見下した言葉を使うと「何だ、頭目らしくない」と批判される。教育の仕方は、頭目、平民に よらない。

他人の家に遊びに行つてそこでご飯を食べるのは、「恥ずかしい (masia)」とされ、年取るまで他人のところへ食べたことがなかった。怒っているとき、「恥ずかしいか (kasia o. o)」という。盗むことも、「恥ずかしい」と批評される。今は、恥も何もわからない。年寄りは、さつさと死んでもかまわないと思つてるように見える。昔は、服装も気を付けた。とくに、男の兄弟が一緒に歩く時、弟は脚絆をつけて歩く。そうしないと、兄さんに申し訳けないという気がした。父母の兄弟に対してもそうだった。わたしの場合、父が早く亡くなり、母も一四歳で亡くなった。汁をこぼしたり、くちやくちや音を立てて食べていたとき、「あんたの食

べ方は「ブタみたい」と姉が注意してくれた。子供に、「過ぎたことは二度と言つてはいけない。今度こちらでお願いすることも有るのだから」と教える。

◇村の中の相互扶助

・以前はむらで病人が苦しむと、村民の男全員集まって、蕃刀をもって悪魔を追出す。暴風の時も、交代で各戸を廻り「大丈夫か」と尋ねた。

・雨漏り、家の改築など、むらの中のシンセキや、気の合った人に「明日、修理しますから手伝つて下さい。」と言つてまわる。昔は、工賃を払わないから、酒と餅と粟飯を振る舞う。

◇社会

・婚姻時の贈り物 昔は、古い壺、鍋、トンボ玉などの伝的な財産を贈るだけで済んだ。今は、平地の習慣を習つて、難しくなった。いまは財産だけでなく、お金も要求する。先ず、「チョウフン」として、初めて女家に、酒、豚肉、砂糖など何万円も使う。それから、訂婚の時、女側の要求によつて、聘金、金の装飾品、大きなシーピン（嬉餅）を用意しなければならぬ。ごちそうも、何卓と用意する。だから苦しい。

自分の場合は、難しいことを要求しなかった。「この娘を可愛がつて下さい」と言うだけ。だけど、向こうでは、ちゃんと準備して持ってきた。菓子二万六千元分、聘金一六万元。娘の夫は、私を生みの親のように見てくれる。結婚の時あまりひどく要求すると、見向きもしなくなる。嫁に行つた子が苦しい。

・嫁姑関係 あまり姑ががみがみ言うとは嫁は実家に帰つてしまふ。「財産」（例えば、お金二・三十元）を持つて呼びに行かないと戻らない。婿

舅関係は不満少ない。婿が怠け者だと、むしろ妻の母親が将来はどうするかと意見をする。

・高雄県のブヌンは、食器を洗わない。花蓮県のタイヤルは手掴みで食べる。このパイワンは、年寄りの話を聞いても昔から匙を使つていた。

・チャカル (Chakal) はそり舌音」という集会所が、頭目の家の後ろに建てられていた。男だけが出入りし、女は行かなかった。子供の頃は女の子でも行つて構わない。男が火をたいて泊まることもあった。大事なことをここで相談したら力があつた。重病人が出たときは、チャカルの灰を持つていつて撒き、悪魔 (namate) を追出す。どこの部落にもひとつだけ有つた。バクヒョウの別のインフォーマントによると、Baborgan家の直系の者が平地人と結婚して平地に降り頭目の家をつぶした時に無くなつたという。旧タラバコンに降りてきたときは、もうチャカルは無かつた。

粟祭の終わり頃、チャカルに集まり、むらの外れの Valvavian の大石のところに行き、ここで英雄を祀つていた。むらの世襲司祭役 (pa takatani) が行つて祀つた。この翌日、みんなで猟に出て、獲物を分けて食べた。

台湾原住民の年齢階梯制では、少年や青年が集会所につめ組織的な活動を行うアミ族とプユマ族、それにプユマ族隣接の台東大南社のルカイ族が知られている。また、集会所としては、年齢集団の活動はそれほど顕著ではないものの、ツオウ族の集会所も有名である。それに対し、明確な組織や施設を持たないパイワン族や中央山脈のルカイ族の年齢階梯はあまり注意を惹いてこなかった。しかし、筆者が七〇年代にアデル村を訪れたとき観察した夏祭りで、男たちがむらの小高い丘に集まる行事や、パイワン族

でもこのチャカルの存在など、明確な組織化以前の年齢階梯的な習俗はもつと注目されて良いのではなからうか。上にもあるように、ここでも社会的秩序は頭目制などの身分制と並んで長幼の序が強調されている。

・六〇年前の宮岡肇太郎氏撮影のフィルムを林東海夫人に見てもらい、そのコメントを聞く。蓑、堀棒、魚具などについての名称のほか、頭目系だけあってクワルスの大頭目 Karangan Kui やカビアン大頭目 Zigurui の名前が出る。男の踊りについて、年寄りが山ブタ、熊、豹や首を狩った手柄話を歌ったものだという。息子さんと共にこの映像が自分たちの文化を伝える貴重なものであると強い関心を示して居られたことは、記録の現地還元として、一つの形を示すという意味はあったと思われる。

・三月二七日八時から一二時奥の旧スパイワン社に登ってみる。マカザヤと違って、すでに住民のほとんどが下に降り、廃村となっているが、石組みの住居は、文化財および観光用に保存してある。数軒、戻ってきて人が住んでいるが、表に人影は無かった。

c) アミ族訪問

◇池上（三月二八日～二九日）

三月二八日南回りのバスで、台東に出、鉄道に乗り換え池上に着く。台湾原住民の人類学的研究を現代の世界的な水準に引き上げた馬淵東一先生の十三回忌なので、台湾に埋葬されているお墓をお参りするため、墓を管理しておられる聞いた池上の大高さんを探ねる。手がかりは、「池上の大高さん」だけで、番地も電話もわからなかったが、宿のフロント、タクシーの運転手、地元の人と尋ね、夕方、大高さんの弟の家にたどりつく。馬淵東一先生は、アミ族のソエル氏（大高正一）と親しくお付き合いをされ、

その縁で台湾のお墓は正一さんの弟の息子さんの高明生氏が管理して居られることがわかった。小生が、一九六八年からプユマ族のむらに滞在して居たときに馬淵先生とソエル氏が尋ねて来られたことがあったが、今はお二人とも故人になられてしまった。高明生氏とは初対面にもかかわらず家に泊まりなさいと、すでにチェックインしていた宿まで車で荷物を取りに行って下さる。すでに、清明節の墓参りは一週間前に済ませたとのことで、その時のビデオを見せていただく。家族、親族のほか地元の研究者も混じり、馬淵先生のお墓も家族が巡拝する順番に入れられ手厚く祀られていることがわかった。翌朝お墓参りをし、台東まで、車検で出られるというので便乗させてもらい、二時間ほどで台東のバスターミナルにつく。

◇石溪（三月二九日～三〇日）

一年調査した海岸線のアミ族石溪を再訪（『台湾アミ族の社会組織と変化』三六五頁、東京大学出版会、一九八三・一二）するためバスに乗る。途中、成功（日本統治期の新港）で乗り換の待ち時間に昼食を取る。以前は、こぢんまりした画のような港町だったのが、道路が広くなり、バスターミナルがバイパスに移されたため、手軽な食堂は見あたらず観光客相手のレストランしかなく、しかも平日のこの時間とて、ほとんど閉まっている。コンクリート建てのこぎれいな洋風の家屋が立ち並び、漢族風の廟まで見かける。やっと一軒開いている店を見つけ、鮮魚湯を注文する。新鮮なマグロのみその薄味スープでおいしい。こうした味は、他の外国では味わえないであろう。ここから、バスで三〇分あまりで石溪の下部落に着く。なだらかな坂をのぼって上部落につき、三二年前、一年近く泊まっていたクラスの家に行くと留守。近所の人に聞くとクラスは台東の病院に入院して

いるとのこと。イダン（年齢階梯の同級組仲間）の Katiu の家に行き、一緒に村をまわる。知り合いも年上はだいぶ少なくなっているが、イダン達は早く事故で亡くなった者を除きほぼ健在だった。晩は、商船の乗組から帰ってきた若者のための宴会に顔を出す。こうした機会に集まる客は、以前はマリニナアイ（親族集団）主体だったのが、最近では、村落主体に変わってきているという。若い者が、酒をつぎ、年寄りが演説をし、みんなが賑やかに輪になって踊る雰囲気は三〇年前と変わっていない。たしかに、三〇年前と比べて都会に出稼ぎに行ったり、長期滞在する人々の数は増え、親族集団が張り合っている社会環境ではなくなったが、こうした社会関係の変化にもかかわらず、遠くから帰ってきた者のために集まって踊りや歌を楽しみ、その内に年齢階梯的な秩序が相変わらず認められるというのは興味深いことである。踊りは夜半まで続いたが、疲れたので、先にイダンの家に帰って泊めてもらい、翌三月三〇日朝台東に戻り、クラスを台東病院に見舞った後、一九六六年から二年滞在したプユマ族 R 村を再訪する。この村でも、当時は見習いであまり話したことなかったが、今では第一人者となっている女性シャーマンの S さんにゆっくり話が聞ける。定宿の T さんのところに二泊し汽車で上北、以前の定宿であった日月賓館に一泊、四月二日に帰国した。今回も、あわただしい割にいろいろなことがわかった旅であった。

現代台湾における祭祀公業について

研究員 後藤 武秀

期間 二〇〇〇年二月一八日～二月二六日

調査地 台湾（台北）

台湾には「没有国那裡会有家、千古不變的道理」という俗諺がある。中華人民共和国との政治的対立がどのように展開していくかについて確たる展望も得られず、国際社会においても一つの政治実体でしかない台湾において、国家がなくても家があるという思想は、その地に生きる人々の共生を根源において支えている原理であると言っても過言ではない。

かつて家族の共生を担保したのは、祭祀公業と呼ばれる祖先祭祀の用に供される土地を中心とする財産であった。しかし土地所有権確定の困難や管理人の専横行為などのために公業にまつわる紛争が絶えないことから、中華民国政府は公業の整理をすめようとしている。このような状況の中で新たに登場してきたのが財団法人として設立された祭祀団体である。一例として、財団法人台湾李氏宗祀を見てみよう。

同法人は一九六四（民国五十三）年に、台北地方法院で設立登記された。設立時の基本財産は新台幣九五三万元余りであり、すべて会員である李氏一族からの捐助による。その目的には、祖徳の高揚という祭祀に係る事項の他に一族（宗族）の福利増進も掲げられている。勿論、財団法人であることから、社会公益事業も含まれており、台北市政府警察局消防警察

大隊に救急車の寄贈などを行っている。しかし、最も大きな事業は一族の福利を目的とするものと考えてよい。一九九五（民国八十四）年の変更登記によれば、資産は新台幣三〇九五万元余りと膨大な金額になっており、これを基に同年度だけで、李氏一族の大学生百名に八千円ずつの奨学金を贈り、八〇歳以上の老人百二〇名余りに対し八〇歳以上は各六千元、九〇歳以上は一万元、百歳以上は二万元の敬老金を支給している。あたかも国家が営むような事業を一族内部において行っているのである。

祖先祭祀を一つの目的として結集した一族が一族共生のための仕組みをどのようにして作り上げているか、祭祀公業の現代的展開には興味の尽きないものがある。

「韓国社会文化の国際化に関する共同研究」に関する調査

研究員 松本 誠 一
研究員 小澤 康 則

期 間 二〇〇〇年二月二日～二月二六日（松本）

二月二四日～二月二六日（小澤）

調査地 大韓民国（ソウル・大邱）

東アジアの社会変動と伝統文化の社会人類学的研究

一、安東大学校民俗学研究所との日韓比較研究第三期計画に関して

安東大学側報告書の訳出作業について、韓国在住、共訳者の進捗状況を

調査・研究活動

確認。遅れている部分について、督促する。

安東大学側の代表者であった成・李両先生に面会するのは三年ぶりである。成先生に続き、現在は李先生も定年退職されており、この間の久闊を叙するとともに近況を伺う。安東大学側報告書の日本語訳作業の進展状況報告、総合報告書作成について意見交換。

また、お二人から、新たな共同研究の企画について勧奨を受ける。お二人の定年により、現在の民俗学研究所の専任者中には日本語堪能者がいなくなつたが、日本研究の促進の重要性を考えると、新たな共同研究を契機として日本研究者育成が肝要とお考えを拝聴し、共鳴する。元所長の千恵淑先生が、二〇〇〇年三月一日から一年間、京都・佛教大学に來られる予定も伺う。

二、「韓国社会文化の国際化に関する共同研究」のための情報収集

小澤研究員を介して、東洋大学の協定校・韓国外国語大学校日本語科の文明載副教授（文学博士、神戸大学。説話）、曹圭哲助教授（法学博士、筑波大学）と会食、外国学総合研究センター・歴史文化研究所・世界歴史文化研究会の資料と説明を受ける。同大は韓国で最高ランクの会話能力を重視する語学大学との認識をもっていたが、お話では、基礎的な会話教育は他大学・専門学校に委ね、今後同大は言語の背景をなす文化・歴史の研究・教育を幅広く展開するために、語学・文学分野に限らない学生交換・研究者交流を強く望んでいる由。

旧知のソウル大学人類学科・全京秀教授を訪ね、韓国の移民に関する資料収集について助言を得る。

大邱のカトリック共同墓地および管理課を訪ね、墓地形式のキリスト教的変異形態を実見する。また海外移民の故人の母国埋葬受入について同墓地では余地がない状況を知る。
(松本誠一記)

二月二日、韓国金浦空港にて松本研究員と合流。松本研究員宿泊先のホテルにて東洋大学卒業の鄭璣(チョン・ジョン)先生に会う。往時の東洋大学留学生の話などを聞く。

二三日、松本研究員と、やはり東洋大学卒業生の崔柏先生(社会学博士、東洋大学)に会う。最近の韓国の学界動向や研究についての話を聞く。夜、韓国外国語大学の文明載、曹圭哲先生と会食。お二人とも日本で博士号を取得、現在は同大の日本語科に在職。東洋大学と韓国外国語大学校は姉妹関係にあり、アジア・アフリカ文化研究所と外大の日本研究所は紀要交換している。将来、共同研究をすることができないかについて話し合う。

二四日、セマウル号で大邱へ。大邱にて奥間先生(社会学博士、東洋大学)および前回の竹辺調査に同行した中川公正氏(画家)と小西明子氏(安東大学大学院、民俗学)が合流。大邱郊外にあるハンティ殉教聖地を踏査。現在ハンティは三七基が殉教者の墓と考証されている。各墓地は離れていて、「殉教者墓跡巡礼の道」で結ばれている。われわれが行ったときも「巡礼」に来ている若者のグループがいた。

二五日、安東大学の李南植先生の案内で大邱市の天主教聖堂墓地を見に行く。墓地管理人の説明を聞きながら見学。午後、同じく安東大学校の成柄禧先生と合流。大邱市内にある天主教の殉教記念館を見学する。資料も入手。ミサに来ていた大邱暁星カトリック大学校の宣先生からカナダ在

住の韓国人信者についての話を聞く。その後、天主教大邱大教区庁を訪問。資料等についての協力を依頼する。基本的資料はホームページで見ることが出来るとのこと。夕方、大邱の漢方薬市場を見学する。通称「葉茶通り」にある第一教会(大邱で一番歴史が古い)近くに、漢方薬の卸売りセンターと産婦人科病院があるのが印象的であった。

二六日、松本研究員は釜山へ。本人はソウルに帰る。(小澤康則記)

「現代化と文化変容」に基づく沖縄調査

(日本私立学校振興・共済事業団平成一一年度(第二四回)学術研究振興資金助成)

研究員 針 生 清 人
研究員 比 嘉 佑 典

期 間 二〇〇〇年三月二日～三月六日

調査地 沖縄県那覇市、名護市

三月二日(木) 羽田出発(JAL903便一〇時五〇分) 那覇到着一三時三〇分。その日の午後は、調査予定に関して詳細な打ち合わせと、先方への連絡調整を行った。

三月三日(金) 午前一〇時に、那覇市首里の沖縄国際センターを訪問。担当職員の兼島さんの案内で諸施設の状況や研修・実習の場を見学させてもらった。午後からは、特に東南アジア諸国からの研修生の受け入れ状況

台湾先住民「高砂族」居住地呼称に関する調査

研究員 大川 正彦

期 間 二〇〇〇年七月三〇日～八月二七日

調査地 台湾（台北市、桃園県三光村、宜蘭県大同郷）

と過去の実績についていろいろ調査した。受け入れ実績はアジア地域が圧倒的に多いが、最近では、アフリカおよび中南米からの研修生も多くなっているとのことであった。研修内容もさまざまで、農業（パイオ関係）からコンピュータ等のハイテクやさらにビデオ放映に関するプロデューサー養成まで、幅広く盛り込まれていた。沖縄国際センターの実績は国内第一で、近年国際協力（事業）青年開発隊の研修・事業にも力をそそいでいる。過去数年間の研修資料を収集した。入手できなかった資料については、当局で調べ準備して後日いただくことになった。

三月四日（土）午前一〇時～一五時の間、那覇市の軍港に隣接した小規模の自由貿易地域を見学した。沖縄の数社が参入しているが、貿易相手国は、おもに台湾を中心に東南アジア諸国と取引が行われていた。その規模は弱小で、沖縄県全体としてはあまり盛況ではなかった。もっとフリーゾーンを拡大してほしい、フリーゾーンを複数地域にもっていく必要がある、政府及び県ももっと力をいれてほしい、積極的な企業の参入がほしいなど、問題が山積している感じを受けた。

三月五日（日）日曜日のため、公的機関の訪問調査ができないので、那覇市内の書店を回って、関係資料の収集を行った。残りの時間を、中国との交易の関係が多かった福州園や、外来使節を歓待した識名園を見学した。三月六日（月）午前中、沖縄国際センターを再度訪問。補足調査をするとともに、依頼してあった資料（特にインドネシアに関するもの）をいただいた。午後、歴史的に東南アジア諸国と関係の深かった百里城を見学した後、一七時五〇分のJAL906便で帰途についた。

今日まで台湾の山地に居住する先住民のひとつであるタイヤル族の文化変化の調査を継続してきた。

文化変化に関する調査は、過去のある事象なり現象が、いつ、どこで、どのような内容形式であったのかを知ることも極めて大切なことと思われる。調査対象であるタイヤル族の風俗、慣習、意識を調べてゆく過程の中で、先行研究に関する文献、例えば「台湾高砂族系統所属の研究」（台北帝大土俗人種学教室）をはじめ、「台湾番族慣習研究」、「蕃族調査報告書」、「高砂族調査書」、「理番誌稿」あるいは鳥居龍蔵、古野清人、鹿野忠雄、森丑之助、岡田謙、馬淵東一、伊能嘉矩、瀬川孝吉といった方々の先行研究図書・論文に記述されているいわゆる「番社」が、今日市販されている地図・地形図で特定することがかなりむずかしくなっているのである。しかも「番社」の新旧名称や所在地に関する文献は皆無に等しい状況である。

文化変化の調査研究には、「番社」の新旧呼称と現在地を確定する作業が必要であり、研究の継続性と深化をはかる上でも極めて大切なことと考えられるのである。書きことばを持たない高砂族の調査は、特に古い時代

の事柄については、古老の方からの聞き取りによって、それを何らかの形で記録に残しておかなければ、永遠に不明の部分を残す結果となってしまふという危機感から、本調査をはじめた。

調査方法は、同一地域の複数の古老の方と郷公所（複数の村を統轄する地方行政機関）の民政課長に面会し、旧陸軍測地部発行の台湾地形図に、あらかじめ判明した「番社」名をマッピングしたものを示し、その確認と不明分を追跡してゆく方法をとった。しかしながら冒頭に述べた「台湾高砂族系統所屬の研究」や「番族調査報告書」等に記載されている「番社」名を覚えておられる方はほとんどおられず、地名調査のむずかしさを思い知らされた。

日本領有時代（一八九五年～一九四五年）の台湾・高砂族に対し、日本当局はその撫育策のひとつとして彼らの居住地を山脚部へ集団移住したと。更に戦後（光復後、一九四五年以降）台湾当局の指導によりその移住と「番社」の呼称の変更を余儀なくされたこと。そしてこれらのことが「あまり古い」ことなので、古老といわれる方の記憶もさだかでないこと等々がこの地名調査のむずかしさを作っているようである。

今回は限られた時間の中での踏査であったが、踏査地域を桃園県復興郷、南投県和平郷、台東県金峯郷、延平郷、宜蘭県南澳郷に限定した。先住民族高砂族のいわゆる古老といわれる方は、比較的早く物故されておられ、かなり昔のことを知っておられる方を紹介され自宅に訪ねても、すでに平地（都会地）の病院で病臥に伏されていたりと、とてもインタビューのできる状態ではなかった。その中でただ一人、元南澳郷々長の李慶台氏に会いすることができた。

氏の話によれば、戦後（一九四五年以降）の集落の移住は、当時の台湾当局の方針に沿って、郷公所が指導主体となって実施されたものであるという。移住先はあらかじめ指定され、簡易住宅と基本的な家財のごく一部がそのために準備された。氏自身は明言をさせておられたが、移住の目的は高砂族の漢民族化と子弟の教育への強力なステップとして、いわば「アメとムチを使い分け」た政策として実施されたようである。この施策は「全山共通」（高砂族の居住している山地）のようであった。集落の名称に関しては、対象集落「番社」の住民の意向に沿って特別な指導は行っていないという。貴重な証言であろう。

今回の調査には、昨年（一九九九年）の台湾大地震の影響が未だ色濃く残っていた。道路の不通箇所や正確な情報は、実際に現地へ行かなければ取れない有様であった。又、天候の良い日でも突然山崩れが起き、孤立してしまうこともしばしばであった。八月中旬以降、台湾はしばしば強風と大雨の直撃に会い、移動手段をオートバイに頼っていた私にとっては痛手であった。又、台風警報が発令されると公官庁は臨時休業となってしまうことも計算外の出来事であった。

悪天候と山崩れの影響で十分な調査は出来なかったが、復興郷エヘンの現在の人口調査が出来たこと、郷公所発行の「行政区域図」を入手出来たこと、元南澳郷々長のお話がかがえたことは、ひとつの成果であると考ええる。今回の経験を踏まえ、更なる新旧地名調査に邁進してゆきたい。

古代中国における漢中盆地の役割を探る

研究員 佐藤 三千夫

期間 二〇〇〇年七月一日～七月三十一日

調査地 中華人民共和国陝西省漢中市他

共同研究「中国と周辺民族の交流と変遷」の調査の一環として、中国漢中市への調査視察を実施した。今回の目的の一つは、漢中市を流れる漢水を見ることであった。

春秋戦国時代、長江中流域には、楚の国があり、中原文化とは異なる蛮夷の国とされた。しかし近年では、むしろ中原文化を継承していたことが、いわれるようになった。では、この楚国、どこが発祥で、どういう経路で長江流域に移っていったのか。これは、今でも楚文化研究の中での重要なテーマとなっている。

周の文化の中心は関中平野。楚が周との関係をもち、後に長江流域へと展開したとすれば、①漢水支流の丹江上流商州市から武関（劉邦が項羽より先に関中に入った時通った関）・鄧県をへて襄樊市に至り、以後漢水に沿って南下する、②関中の南側秦嶺山脈を越え漢中盆地に入り、そこを流れる漢水に沿って南下する、の二つのルートが考えられる。今回は、②の秦嶺山脈→漢中盆地→漢水→長江というルートの可能性を探ることにした。すなわち、漢中盆地を流れる漢水は、船が通れるような川なのか、と。

陝西省西安は、周の都鎬京、秦の都咸陽、漢の都長安など歴代王朝の都

城の地。渭水盆地全体は、標高五〇〇～三〇〇メートル、一面緑のトウモロコシ畑が続く、豊饒の地である。北は、黄土高原、南には三〇〇メートル級の山々が聳える秦嶺山脈が連なる。西から太白山、首陽山、終南山そして驪山とつづく、中国古典に名を残す山々だ。この秦嶺山脈の南側に、漢中盆地がある。古くは漢の劉邦が咸陽から漢中へ、そして諸葛孔明が蜀漢から五丈原へと、この山中を通った。古来ここを通る古道には、東から子午道、黨駱道、褒斜道、そして故道（西安から成都への鉄道路線）の四本のルートがあったといわれる。今回は、西安から漢中へ、西安から宝鶏（褒斜道から途中故道に入る）へという、二つのルートをバスで通ることにした。

西安を出発。西安→漢中行きバスは、西安から高速道路で武功県まで行き、そこから南下し山越えする。このルートは国道一〇八号、東側から二番目の黨駱道か。どのような峠を越えるのか、と期待したが、最近でできたと思われる、かなり長いトンネルで通り抜けてしまった。このトンネルによって、このルートが西安→漢中間の大動脈となったようだ。途中佛坪県、洋県を通り、漢中市まで、約八時間の道のりであった。

漢中盆地の漢水は、川幅四〇〇メートル、水の流れているところでも、一〇〇メートルはあり、これなら十分船が通行できたに違いない。漢中市の東城固県にある張鞏紀念館の館長に聞いたところ、下流にダムができるまでは、湖北省から船が通じていた、とのことであった。漢中の標高約六〇〇～五〇〇メートルからすると、漢中盆地の東側山地内（石泉市・安康市）で、かなりの急流になることが考えられた。そこが本当に船が通れるのか、今後確認したい。

漢中盆地は一面が水田で、長江流域の景色に通じ、同じ陝西省の畑作中心の渭水盆地とはまったく異なる。米があるならひよっとして、と瓢箪から駒のように、ブランド銘「黒米酒」の醸造元（洋県）に行ってみた。黒米酒は、発酵酒であり、基本的には紹興酒と同じ。しかし、古代米の黒米の名を取っているあたり、水稻文化の伝統を感じた。その時、本当に黒米が使用されていたかは確認しなかったが、黒米は、洋県の特産品の一つである。漢中から四川盆地へは、国道一〇八号がそのまま通じている。四川盆地は、漢中の人々にとっては、関中平野より身近な存在のようだ。料理も四川風味が主で、湖北省との交流も一般的という。とすれば、水稻文化圏として、長江（武漢）↓漢水↓漢中盆地↓四川盆地↓長江という、広域ネットワークの存在も考えられるのではないか。

現地の人々に、漢中は、蜀か巴か、と質問すると、どっちでもいい、との答えが多かった。古代においては、成都の地が蜀、重慶の地が巴というように区分されるのではなく、むしろ、漢中盆地が、水稻文化交易圏のひとつとして、楚、巴、蜀などの割拠する地であつたかもしれない。

帰路は、漢水の上流褒水（周滅亡の原因となった褒姒はこの流域の出身）に建設された石門ダムを通る。ダムのできる前は、ここに古栈道があり、現在一部復元されて、観光用の栈道となっていた。おそらく褒斜道であろう。古の栈道はいかばかりと、満々たる水を湛えたダム湖を横に見つつ、再び秦嶺山脈の中へ。途中西に方向を変え、張良廟を通って、故道に入る。そして、渭水盆地への最期の峠が、武散関（大散関あるいは散関）。数々の歴史ドラマを映し出すかのように、暗闇の山の中、「武散関」の扁額がアップライトに浮かび上がっていた。

今回の調査で、漢中が稲作文化圏に属し、湖北省と密接な交流のあったことが分かった。また、秦嶺山脈は、険しい山地であるが、古来より人跡多く、渭水盆地との関係もまた密接なものであつたと考えられた。楚が周との関係をもったとして、どこにいて、どこを通過して関中に行つたのか、これは未だ謎である。可能性としては、①のルートがより妥当なものと考えられようが、漢中盆地も何らかの関係で、楚と結びつかないともかぎらないであろう。今回その可能性を実感したとともに、より広範囲な交易圏の存在も考えられたことは、今後の研究に有意義であつた。

中国の少数民族地域における「普通話」の普及政策と実施状況

研究員 王 亜 新

期 間 二〇〇〇年七月二日～八月二日

調査地 中華人民共和国・新疆ウイグル自治区

今回の研究調査は、昨年の雲南省調査に続いて二度目である。目的は、中国の少数民族地域での「普通話（標準語）」の普及政策及びその実施状況の調査であるが、同時に、少数民族地域で実施されている言語政策及び学校教育の現状についても調査した。

(1) ウルムチ市

七月二二日に成田を立ち、北京経由で二三日の午後、新疆ウイグル族自治区首府ウルムチ市に到着した。翌二四日午前には自治区教育委員会を訪

間し、教育委員会外事辦公室的担当者から自治区全体の民族分布状況及び現行の教育方針・政策について説明を受けた。

新疆ウイグル自治区は、人口が一七〇〇万人のうち、半数が少数民族で、ウイグル族は自治区の主体民族である。そのほかにカザフ族、タジク族、モンゴル族、回族、ウズベク族などの少数民族がある。

新疆では、漢民族を除いて基本的に自民族の言語による教育が行われている。「普通話」は外国語科目として勉強されている。ウイグル語は五〇〇年の歴史を持つ独自の民族文字を持ち、すべての分野が表記できる発達した文字系統である。その起源は、イスラム信仰に関係しアラビア文字から変化してきたものと言われる。ウイグル語の語彙は、歴史的にはアラビア語から大量な語彙を吸収し、現代においてはロシア語、漢語、英語から外来語を吸収し、たいへん豊富な語彙量を持っている。ウイグル族の人は、自分の言語と文字にたいへん誇りを持っているようである。

ウイグル族は、イスラム教を信仰し、文化伝統、生活習慣などあらゆる面で民族としての特色を持っているので、基本的に仏教信仰の文化を持っている漢民族及び他の少数民族とはかなり違っている。そのため、新疆少数民族と漢民族の間に、昔から民族関係が常に心配されている問題である。今回の調査で特にそのような問題を見かけるようなことはなかったが、昨年行った雲南省と比べて、やはり民族の違いを強く意識させられた。

ウルムチ市での調査中に、市内を短時間で回ってみたが、市内の様子は、ほかの漢民族地域の都会とほとんど変わらない感じだった。政府機関や商店、レストランなど公的な場所では漢民族出身者が多く、ウイグル族はここでも「少数」民族という感じである。しかし、旧街区には、ウイグル族

が集中して住んでいる街があり、ウイグル族の店がずらりと並び、ウイグル語が飛び交っている世界となり、他の都会では見られない側面を見せていた。

新疆自治区は、ウイグル語と「普通話」が併用されている地域である。街角の看板や交通標識、空港や駅構内の放送などは基本的にウイグル語と「普通話」の二言語が併用されている。しかし、実際に市民が話している言葉はやはり漢語であった。ウルムチ市内での食事や買い物などには特に言葉の不便を感じなかった。

二四日午後、自治区の社会科学民族研究所を訪問し、その後、自治区図書館を訪れ、教育関係の図書と資料を調べた。新疆自治区の図書館は、他の地域と違ってウイグル語と他の少数民族言語の図書が比較的豊富に所蔵されていた。

(2) トルファン地区

七月二五日正午に、ウルムチ市から長距離バスでトルファンへ移動する。現地の人が普段利用しているバスなので、大勢のウイグル族の人が乗っていた。隣席のウイグル族青年と会話を試みようとしたが、漢語があまり通じずすぐあきらめた。

途中、風が起きて、バスは砂嵐の中を三時間走り午後トルファン市に到着した。

夕方頃、トルファン市近郊の村を訪れ、小学校周辺をまわり、地元の小學生と会話を試みたが、標準語のレベルが予想以上に低く、難しい内容の話はほとんどできなかった。

翌二六日に、トルファン地区教育委員会を訪れ、教科科マイミン・ナム

トリ（賈明・乃木土力）課長よりトルファン地区の民族分布状況、教育体制、教育内容及び現地の言語使用状況について紹介を受けた。

課長の紹介によると、トルファン地区は人口五十四万人で、ウイグル族は七〇%、漢民族は二五%。小学校は一五〇校、中学校は二六校あるが、漢民族学校とウイグル族学校が別々に作られている。ウイグル族の学校では、基本的にウイグル語による教育を行い、「普通話」を外国語として習っている。一九九七年から二言語教育を実施しはじめたが、まだ「普通話」のレベルが低いようである。また、トルファン地区の高校進学率が低く、中学三年までの義務教育が終わると仕事に就く生徒が多い。農村地域では、小学校を卒業してすぐ働く子供も多そうである。

午後、トルファン市内を散策したが、意外と小さな街だった。ホテルや商店などに勤めているウイグル族出身者の「普通話」レベルは比較的高かった。ここもほかの町と同じく、漢民族の「出稼ぎ」組が多く、いろいろな店を営んでいる町全体が活気に溢れている。

翌二七日にトルファンを離れウルムチ空港へ向かい、飛行機でカシユガルへ移動する。飛行機の離陸が遅れ、空港で三時間半待たされ夜中の三時三〇分にやっとカシユガル市に到着した。

(3) カシユガル地区

カシユガル地区は新疆の最西端にあり、人口は約三〇〇万人で、ウイグル族は約九〇%を占めている。漢民族は八%で主として都市部に住んでいる。カシユガル市内の人口は約三〇万人で、ウイグル族と漢民族はそれぞれ五〇%づつの割合である。

カシユガル市に着いて感じたことは、漢民族の割合が少し減少し、ウイ

グル族のほうが増えたことである。ホテル、商店、レストランやタクシーの運転手もウイグル族の人が多く、いかにも「ウイグル族自治区」に来ている感じがであった。

翌二八日午前に、カシユガル地区教育委員会を訪問し、地区の概況を紹介してもらった。教育委員会のアウティアサン（阿吾提艾山）課長の紹介によると、カシユガル地区には、小学校は一二一七校、中学校は一七〇校ある。学校は基本的にウイグル族の学校と漢民族の学校に分れている。

カシユガル地区の「普通話」レベルは、新疆でも低いほうであるが、最近、「普通話」の教育に力を入れ始めている。カシユガル地区からは、毎年、北京大学、北京師範大学、西北大学など北方都市の大学に学生を送っているが、文系が多く、理系に進学する学生はまだ少ない。アウティアサン課長自身も北京師範大学の中文系（漢文学部）の出身だとのことである。カシユガル地区の教育担当責任者という立場の人としては、二言語教育の推進に強い意欲を見せていた。

午後、カシユガル市内に出かけ、有名なイスラム寺院とウイグル族の有名な文学者のお墓を見学。その日の気温は三八度で、炎天下の歩行はつらかった。

翌二九日に、カシユガル空港へ向かいウルムチ市に戻ろうとしたが、今度は飛行機が四時間も遅れて、三〇日の早朝四時三〇分にウルムチ市に到着した。新疆は北京と二時間の時差があるとは言え、四時三〇分の到着はやはり尋常ではない。ホテルに入って三時間寝てまた慌てて空港へ行き、一二時の飛行機で北京へ向かった。

今回の調査は、新疆ウイグル自治区の言語教育と「普通話」教育の実態

について、ある程度調べることができたが、夏休み期間中でもあり、現地の学校も全部夏休み中であつたため学校教育の現場を見ることが出来なかつた。また、ウルムチ市以外の地域に行くと、ウイグル族の人の標準語レベルが予想外に低く、面談調査が充分にできなかったのが残念であつた。しかし、トルファン地区とカシユガル地区を回り、両地区の学校教育の現状を多少なりとも理解でき、また資料収集の目的も果たせたことは大きな収穫であつた。

琉球の創造力(4)―沖縄人の発想と石敢當に関する調査

研究員 比嘉 佑典

期間 二〇〇一年一月三日～一月九日

調査地 沖縄県(那覇市、名護市)

一月三日 一〇時五〇分、JAL903にて羽田より出発。一三時五〇分

那覇到着。

一五時〇〇分高速バスで名護市へ(一六時四〇分着)。名護市に宿泊。

一月四日 午前中…旧名護町・東江地域の石敢當を調査。午後から名護市屋部集落の石敢當の調査を行った。正月休みのため、もっぱら石敢當の多い集落を調査して歩いた。コンクリート製、石材の石敢當の外にブロックの外壁を使用した石敢當などが多数あった。名護市に宿泊。

一月五日 午前中…今帰仁村諸志、兼次集落の古い石敢當の調査を行った。そこは古い農村地域で拝所の多い地域である。その関係で、都

心である名護市とは異なって、伝統的な石敢當の調査を行うことができた。午後からは、今帰仁村歴史博物館訪問。かねてよりお願いしていた館長の仲原弘哲氏に最も古い村落今泊(親泊)の石敢當を案内してもらった。平成一二年に「今帰仁村の集落」について特別展示を行ったとのことで、その関係からいろいろ今帰仁村の石敢當についてお話いただいた。名護市に宿泊。

一月六日 名護市中央図書館を訪問。館長の島袋正敏氏の案内で、名護市久志集落の石敢當の調査を行った。午後一五時に図書館にもどり、集落の資料と名護市全体の関係資料を収集した。名護市に宿泊。

一月七日 日曜日を利用して、本島北端の国頭村へ出掛け、奥の集落を調査して回った。この地域はやんばる(山原)の山村である。名護市に宿泊。

一月八日 午前中那覇市へ向かう。県立博物館や図書館、資料館は休館日のため、午後から那覇市内の書店で資料を探して歩いた。ついでに、都市の石敢當を壺屋地域を中心に見て回った。都市部の石敢當は、主にコンクリート壁、ブロック壁のものが多かった。多分交通事情のせいであろう。那覇市に宿泊。

一月九日 午前中…県立博物館と図書館によって資料収集を行った。午後一五時二五分のJAL907で帰京(一七時三〇分着)。